

厳しい暑さも少しずつ和らぎ、特に朝夕は過ごしやすい気候になりましたね。

昔から秋こそが月を見るのに良い季節とされており、10月6日には中秋の名月を控えています。

空気の澄んだ夜空を見上げて夏の暑さで疲れた心身を癒すのはいかがでしょうか。

当センターでも10月6日の昼食に月見まんじゅうの提供を予定しているので楽しみにしていて下さいね。



中秋の名月について

中秋の名月とは旧暦8月15日（今年は10月6日）の十五夜に行われるお月見の習慣です。

旧暦では秋の期間を7月から9月に位置づけていて、その中で8月15日を中秋と呼び

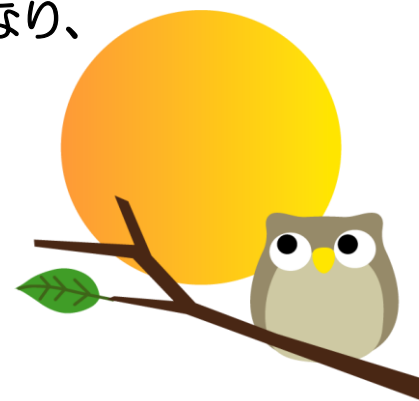
その日の満月を中秋の月と称していました。

この季節は空が高く澄み渡り美しい月が見られるため中秋の名月と親しまれるようになり、

お月見を楽しむ日になりました。また秋の収穫祭と結び付けてその年の豊作を月に祈り、

収穫への感謝の想いを伝える風習になったとされています。

今回は中秋の名月にちなんだ行事食などを紹介していきます。



お月見団子

満月のような形を模していて、月への感謝と祈りを込めたお供え物とされています。

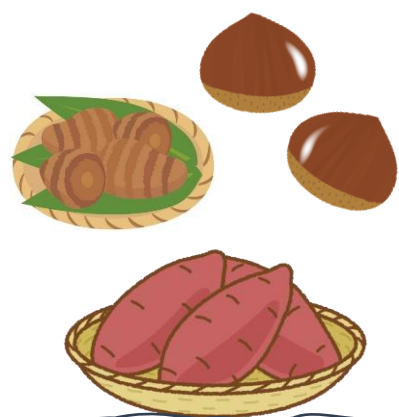
また、収穫への感謝を形にしたものでもあり豊作祈願の意味合いも強いです。



ススキ

旧暦の8月15日頃だと稲はまだ収穫前で青いため実った穂に似たススキを代わりにお供えします。

ススキには鋭い葉先があるため邪気を払う力があると信じられていました。



芋や栗などの秋の味覚

旧暦の8月15日ごろは里芋の収穫時期と重なることから芋名月と呼ばれることもあります。地域によってはお団子よりも里芋や栗、さつまいもなどを供える

家庭もあるそうです。これらの食材はすべて秋の恵みであり、お月見は単なる鑑賞行事ではなく収穫祭としての意味が色濃く残っています。

合わせて楽しみたい十三夜

お月見は十五夜だけではなくありません。昔から旧暦9月13日の十三夜も大切にされてきました。豊作を祈願する十五夜に対し、十三夜はすでに収穫された秋の恵みに感謝し、また来年の豊作を祈る意味が込められています。

今年の十三夜は11月2日。十三夜はこの時期に旬を迎える栗や枝豆を供えて、「栗名月」や「豆名月」とも呼ばれ親しまれています。

昔から十五夜と十三夜の片方だけしか見ないのは「片見月（かたみづき）」といい、縁起が良くないとされてきました。

静かな夜に浮かぶ月は今も昔も変わらず、私たちのところを優しく照らしてくれます。日常を忘れて秋の夜長を楽しんでみるのはいかがでしょうか。

